

# 「この人この経営」 第43回

## ”コメの呪縛“からの解放

矢久保英吾さん（64歳）

〒018-11606

秋田県南秋田郡八郎潟町夜叉袋梨子ノ木89-1

☎018-1875-2906



【プロフィール】昭和13年4月、新潟県で生まれる。中学卒業後、3年間の桑作り農家で“丁稚奉公”の後、北海道入植を試みるが挫折。その後、“短期派米労働者”として米国で働いた後、昭和43年に大潟村に入植。昭和62年、仲間4人で“大潟村あきたこまち生産者協会”を立ち上げるが、“一生産者”としての立場を取り戻すために脱会。稲作は乾田直播で行い、業務用と直売を兼ねるイチゴ栽培に取り組む。家族は、敏江夫人、後継者の諭氏とお嫁さんの友子さん、それに2人の孫。

「米の呪縛」。それが稲作農家を思考停止状態に陥らせている」

「呪縛」。へまじないをかけて動けなくすること。転じて、心理的に人の心の自由を失わせること。「が解ける」（広辞苑より）。

矢久保英吾氏（64歳）は栽培2年目に入ったイチゴハウスの中でそう言った。

「業務用の契約栽培と直売。雪の八郎潟だからこそ魅力を出せる直売を組み合わせたイチゴ作りですよ。13・5haの稲作を続けるためには乾田直播しかない。省力・低コストだけでなく品質も食味も収量も上がる。でも、大潟村では米しか出来ない、代掻きや田植えをしなかつたら、などと言って試そうともしない。試しても直ぐに挫ける。心の問題なんです。米の呪縛“の中”にいますかと思えない。でも、米作りしかない経営に未来があるのだろうか？」

そして、矢久保氏はその「呪縛“から解放放たれる手立てとして、レーザーレベラで均平する不耕起乾田直播に取組んでみるべきだと語る。

矢久保氏は平成13年から13・5haのほぼ全面積であきたこまちを不耕起の乾田直播で栽培している。すでに7年前からレベラの均平だけで代掻きをせずに田植えを続けてきた。

平成13年からの連棟20aの高設土耕栽培によるイチゴハウスは、さらに今年、

脚立のような水耕パイプを連ね、そこに7段のイチゴ苗を植え付けていくという最新式の立体型水耕ハウスを増設し、そこへもイチゴの植付けが始まっている。新しい水耕システムは同じ面積で旧来の4倍の株数で栽培が可能であり、暖房費のハンデを持つ雪国では大きな意味を持つ技術だ。過去に地床で5年間イチゴ栽培体験を持つ同氏であるが、水耕は初めだ。

矢久保英吾氏が語る「米の呪縛」という言葉を、同氏の歩んできた50年の農業経営者としての道を辿りながら考えてみたい。

☆ ☆ ☆

昭和36年11月25日。雪の新潟県長岡駅に3頭の乳牛と少年を連れた若者が立っていた。23歳の矢久保英吾氏である。少年は5歳年下の弟・誠二氏。矢久保氏が待つていたのは牛と一緒に乗る貨物列車だった。

矢久保氏は長岡市と小千谷市に挟まれた山間の豪雪地の生まれである。中学卒業後、桑作り農家に丁稚奉公に入った。長岡駅で連れていた牛は、奉公先からの年3万5千円の小遣い3年分を貯めて買った乳牛とその子牛だった。3年間の奉公が明けると、すぐさま1年間の実習生として酪農学園に入った。そこで出会った友人宅に牛と一緒に居候しながら入植地を探すつもりだった。そうして第一歩

を踏み出した矢久保氏の農業人生は生半  
ではなかった。

11月25日に長岡を出て岩見沢に着いたのは12月10日だった。2週間かかった。季節外れの吹雪が行く手を阻んだ。青森に着く頃には牛の餌として持ち込んだワラすら乏しくなっていた。競馬関係者に教えられて市場から野菜屑を買ってきた。貨物列車だから運良く水道のある場所に停車しなければ牛に飲ませる水の調達もままないどころか、お金はあっても駅弁も買えない。2週間、牛の乳を飲んで我慢するほか無かった。暖房など無い貨車。凍えるかと思えば、船倉に閉じ込められる連絡船はゆだるような暑さだった。でも、そんな苦勞をして連れて行った牛も1年後には水害で3頭とも廢牛にしてしまう。

居候先の友人宅は水田と酪農をする開拓農家だった。一緒に入植地を探してくれた。しかし、3年間、仕事の合間に道内各地を歩いたものの、矢久保氏が用意できる金額で叶う農地は見出せなかった。北海道入植の夢は費えた。でも、たくさんの人々に出会えた。

## 短期派米労働者

その頃、アメリカ行きを勧めてくれる人がいた。昭和38年のことだった。派米研修といっても現在のそれとは違った。

建前は「研修」でも現実は文字通り「短期派米労働者」である。貧しい日本から労働力不足の豊かなアメリカへ期限付き単純労働者としての受け入れだった。

当時を振り返って矢久保氏は、「50年農家をやってきたがあんな辛い3年間は無かったナ。研修生というより奴隷だった」と述懐する。

40℃を越す暑さの中で平床のキュウリの収穫や間引き作業。長さ1200mの畦を、わざわざ日本人の間にメキシコ人や黒人を間に挟み話しができないようにして作業させる。炎天下で腰を曲げ、畑に跪き、這いずり回りながらの労働だった。

しかも、行った翌年からは農業労働者のユニオン（労働組合）から日本人労働者の排斥運動が起き、矢久保氏ら日本人



“A型フレーム”と呼ぶ水耕栽培システムは、同じ面積で従来の4倍の株数を収容できる。作業上の価値だけでなく、暖房費の節減にも効果的だ。しかし、車椅子の人が入れるように、基本設計より空間を広く取っている

農業労働者はカリフォルニア各地の農場を転々とした。

仕事は過酷だった。でも、そこで暮らし方ではなく、経営としての農業をリアルな姿で見、そして学んだ。ある農場で出会った70歳を過ぎた日本人一世の農場マネージャーは、素手で釘を打った。移民で米国に渡った日本人一世、二世の生き様を見たようだった。そして、こんな日本人たちと自分のような労働者がカリフォルニアの野菜やイチゴや花を創り上げたのだと納得した。それは搾取への口惜しさでなく日本人としての誇りだった。

「やればできる」という覚悟は体が覚え  
た。たくさんのヒントや夢の種が落ちていた。夢があつたから辛さを堪えられたし、困難の中にも夢のヒントを見出した、  
と言ふべきなのかもしれない。

## 大瀧村への入植

昭和42年、僅かなお金を握りしめて帰国。翌年（43年）、第二次入植者として大瀧村に入植。矢久保氏29歳。遠回りであったが、雪の長岡駅を出てから7年。夢の実現だった。同時に幼馴染の同級生である敏江さんと結婚した。第一期配分の水田は10ha。そして後日の追加配分で都合15haの稲作農家となった。

しかし、入植したその春に母親が食道ガンの宣告を受け、秋に亡くなった。村を出て行こうという息子を励ましてくれた母親だった。大瀧村入植を誰よりも喜んでくれたのも母親だった。

入植開始数年後には減反が始まった。歴史の皮肉のようだった。大瀧村は国家事業として始まった大規模稲作経営のモデル農村である。であればこそ、干拓地という基盤条件だけでなく、入植者たちも農協も行政も「米」あるいは「稲作」に心を縛られてきた。日本の中でもっとも「米の呪縛」に取り憑かれてきた村なのかもしれない。

転作が始まって農協もアムスメロンをブランド化しようとした。しかし、頼るのは農水省の指導通りの大豆や麦。市場の要求など問われるはずもなく、農家の意欲や創意から生まれてくる商品や事業の開発という発想ともおおよそかけ離れたものだった。農業経営の未来に対する問いがそこには無かった。

矢久保氏も様々にチャレンジした。メロン、カボチャ、キャベツ、ハクサイ、ハトムギ、ローメインレタス、ステビア、ブロッコリー、モロヘイヤ、イチゴ等々。それを市場に出荷するのは敏江さんの仕事だった。育苗ハウスを使って比内鶏2千羽を飼ったりもした。農協に委託したが、結果は散々だった。

中でもイチゴは、アメリカのストロベ

リー農場で収穫労働者として働いた頃からの夢だった。昭和55年に50m・4棟の育苗ハウスを使った試作段階から、57年に4間半×50mのハウスを25棟まで規模を拡大した。1・25haである。売り先は今回の出荷先でもあるケーキ屋さんへの業務用出荷だ。しかし、59年冬、始めて5年目に全てのハウスが雪で倒壊してしまった。諦めざるを得なかった。矢久保氏はそのショックで心因性の肝炎になって100日間入院してしまったと笑う。今回のイチゴはそのリターンマッチでもある。

ともに様々なチャレンジに取組み、農業や経営の未来を語り合う仲間たちがいた。話せば話すほど農業、時代にそぐわない食糧法の矛盾、政治に依存し続ける農家の限界に気付いていった。

そして、昭和62年、仲間4人とともに大瀧村あきたこまち生産者協会“を”発足させた。農家が自分の米を精米し自ら袋に名前を入れて販売するのは、当時では常識破りの“事件”だった。お客さんなど一人もいなかった。敏江さんが習っていた琴の先生の家元に頼った顧客開拓によっての注文が最初の顧客だった。当然のことながら当時の行政や農協からの圧力を呼び、あらゆるメディアがそれを大きく報道した。それが全国に顧客を作るきっかけとなった。矢久保氏たちによる挑戦が大瀧村にとどまらず日本の農業



レーザーレベラによる均平作業。この作業が発芽を確実にし、除草剤使用を最小限のものにする (写真提供：スガノ農機)

や稲作経営に変化をもたらすきっかけであったことは間違いない。

その後10年間は生産の傍ら協会の役員として仕事をする。顧客も増え、米を集荷するようになっていった。それは事業の発展と言わなければならない。しかし、矢久保氏は“生産者であること”へのこだわりを捨てきれず同協会を離れることとなる。

### レーザーレベラによる不耕起乾田直播

矢久保氏は自ら土や作物と触れる“農業生産者”であることにこだわりたかった。

土の命、水、空気、風土の中で作物の持つ可能性を引き出す演出者として。自

然の偉大さに感謝し、命の神秘に触れながら汗をかく者でいたかった。その形で、食べる者に対する役割を果たしたいと思った。

それは“土作りする者”と言い換えてもよかつた。耕土は最低でも50cm確保したいと考えた。ポトムプラウでの反転深耕。大瀧村特有のヘドロ土壌は豊富な有機物を含んでいる。乾土効果だけでも大きな肥効が得られるはずだ。緑肥(レンゲ)や大豆作付けで有機質を補給する。また、排水を改善するために「モミサブロー」(スガノ農機のトラクタ装着方式)で粗穀暗渠(5m間隔)に入れられた。

そうした土作りを前提として、最初の年はレベラによる均平だけで無代掻きで田植えすることに挑戦した。7年前のことである。

その年の田植えは6月13日。しかも、無代掻きである。周りはすっかり田植えが終わっている。多くの人々は奇異な目を向けた。プラウで起こして、しかも代掻きも掻かない。田植機が埋まってしまうと噂する者もいた。

その時使用したレベラにはまだレーザーが付いておらず、メーカーであるスガノのスタッフに均平作業を頼んだ。オペレータの能力も高かつたが、手調整でもレベラでの均平・鎮圧は素晴らしい。オペレーターは1枚1・25haの田に水を入れてみる

と、一気に水が広がっていく。その均平性の高さが証明された。しかも、田植えには何の支障も無い。

矢久保氏は育苗ハウスを使わず、被覆シートだけで風除けもしない育苗方法をとっていた。そうして育てた遅しい苗は田植えの遅れなど問題ではなかつた。土壌管理が徹底されているという自信もあつた。代掻きについても、乾田状態での適正な表層鎮圧が出来れば機械がはまるようなことも無いのだ。

その体験から、翌年にレーザーレベラを導入し、いよいよ乾田直播に取組んだ。そして、中畦を外し、1枚を2・5haに田の区画を変えた。

播種機はスガノが同社の縦軸ハロー(バーチカルハロー)にベルト式シダーを30cm間隔で並べて装着しただけのものだった。また播種機は満足とはいえなくとも、矢久保氏は乾田直播を繰返し、自信を付けていった。1〜3粒位までの誤差で株間15cmに点播できる播種機があれば問題無い。3粒播いたとして50%発芽すれば平均1・5本発芽する。それ以上に大事なのは深い作土であり、表層3cm位の土層で発芽に適する土壌の水分を維持できるようにすること。そのために鎮圧を伴うレーザーレベラによる表層均平が重要なのだ。

「直播の稲は、出芽すれば6日ごとに規則正しく新しい葉が出てきます。移植に

よって根を切らず、自然のままに直根が伸びていくために稲が本来の生理を取り戻すでしょう。だから根にとつての環境作りが重要なのです。稲本来の生理に合わせた栽培をし、余計なことをしない。そして、本来刈るべき時に刈ればよいだけなのです。圃場の準備こそが本当の仕事なのです。それが省力やコストダウンにつながると思えるべきなのであり、稲作技術の目指す道なのは：」

平成14年産では、事前のプラウ耕もせずレーザレベラをかけるだけで播種をした。ワラの腐食を速めるために収穫時にワラの放出を工夫しただけだ。5月14日に播種し、30日前後に発芽した。必ずしも全面均一の発芽と言うわけでもないが、それだけにこだわる必要はない。中干も一切しない。しかも、矢久保氏は無肥料なのである。土の力と稲の力で育てるのだ。

「直播は除草剤依存型になる」、登熟が揃わず青米が増え食味や品質が悪い「などという人がいる。しかし、

「移植の稲と同じ時期に収穫すればそういう結果にもなるが、直播稲は移植栽培の稲と比べ15日から20日ずれてもまだ登熟する。それを待つて収穫すれば品質上も全く問題無い」と矢久保氏は言う。

矢久保氏の成果を見て、実際にその米を食べてみるとそれが誤解であると思つた。

なにより、顧客がそれを認めているのだ。同氏のお米は食味も品質基準も農業使用基準も厳しく要求する「びつくりドランク」のアレフに全量契約出荷している。除草剤も一回使用だけで、他の農業は使用しない条件だ。それを前提に、人が羨むような価格での販売だ。

収量は9俵から9・5俵。しかも、精粒歩合は97・7という高さである。これらを見ても、世の中には直播への誤解があることが知れるだろう。

「代掻き・移植の観念に囚われた目で乾田直播を見ている限り本質が見えない。直播の技術がどうかという前に、代を掻いて苗を育て田植えをすることが稲作だという「観念」から抜けることができないからです。心の問題」なのです。現在の稲作技術を問うどころか疑問を抱くことすらしない。困難はあります。それをどう克服するかを考えるエネルギーの無い者は取り残されていくのです」

矢久保氏が語る「米の呪縛」とは、同時に「移植稲作への技術信仰の呪縛」でもあるのだ。

矢久保氏の言葉を言い換えるなら、稲作農家が農業経営者として生き残るためには、多くの農家が金科玉条にしている「稲作」あるいは「米」から自由になること。そして「代掻き・田植え」という技術信仰を疑ってみるべきだということだ。さらに、転作として奨励される麦や

大豆にしても、作るだけならそれは稲作の裏返しに過ぎない。それは政府にあってがわれるまま安楽な自然死への道歩んでいるだけ。それでも、その呪縛の中にとどまるのか：。

米は日本人の主食である。また、神話として語り継がれるほどに稲、稲作、水田は瑞穂の国・日本の文化や伝統的生活習慣の核を成してきた。日本人にとって

「お米」とは特別な作物であるには違いない。しかし、農家や農業界が矢久保氏の言う「米の呪縛」に自ら金縛りにされてしまったのは、農業政策が米に偏重するようになってからではないか。減反開始後、ますます政治への依存度を高めた農業や農家の在り様がそうさせたともいえる。農家にとって米（あるいは、その



乾田直播による播種作業。株間15cm、1~3粒の点播で移植稲以上の生育をする（写真提供：スガノ農機）

転作）ほど楽にお金を得られる作物はない。農業を事業として取組もうと言う専門的な農家においても、麻薬に取り付かれた者のように稲作と言う安楽な経営手段以外を考へることが出来なくなってしまう。と言つたら読者は怒るだろうか。困難さではなく、安楽さの中でこそ我々はその未来を問われているのである。

矢久保氏は、山間の豪雪の故郷を後にして農業を農業経営者になる人生を歩んできた。夢を持てばこそ困難に直面した。困難が新たなチャンスに気付かせ、挑戦への勇気をかき立てた。そんな生き様の中で、現在という「過去の結果」にしがみ付くことが、自らの未来を失わせていくものであることを矢久保氏は知っているのだ。

人は村に、時代に、農業界に、稲作農家に、産み付けられる。そのままの疑問もたず一生を暮らす者もいる。しかし、時代はもう別の歴史段階に入っているのだ。米の呪縛に囚われた農業そして農家は、村に、そして農業の世界に、改めて自ら生まれ直すことを迫られているのではなからうか。そのためにこそ日本の社会、農業、さらに耕すということの本質、土と作物と自然、そして命、そこにかかわる農業経営者としての己を問い直して見る必要があると、矢久保氏は言っているのではないだろうか。